

《中学生の部》

佳作（警察庁交通局長賞）

栃木県星の杜中学校

2年 青木 心音

ルールを守る人を増やすために

私はとても臆病だ。よく言えば慎重だといえる。日頃からこの性格が災いして、何をするにも遅いと言われることが多い。

どれくらい臆病かというと…。信号のない横断歩道では、車が見えれば、絶対に渡れるであろう距離でも、怖くて渡らない。なのでせっかく横断歩道の前で車が止まってくれた時も、どうぞと身振りで伝えてしまうのだ。母と一緒に歩く時は、母が渡っても立ち止まってしまう。

「大丈夫だから、早く渡りなさい！」

と言われたり、場合によっては手を引かれたりすることもある。中学二年生にもなつてと言われるかもしれないが、距離感がつかめないというのは本当に恐怖しかないのである。

それもこれも、世の中がたくさんの情報であふれているからだ。交通事故のニュースをよく見るが、子どものそれは、自分が気を付けてもどうしようもないものばかりだ。そんなニュースを見るたびに怖くて仕方ない。

ある日、そんな私を見て、母が言った。

「いつも、車が止まってくれても渡らないでしょう？そこまでする必要はないと思うよ。」

必要ないとはどういうことか。車に先に通り過ぎてもらうのだから、むしろ安全なのではと思った。しかし、車を運転する母の意見は違った。ドライバーは渡る人がいれば止まって当たり前。だから止まってくれた時は素直に渡っていい。というものだった。それでも私は母の意見に賛同できなかった。なぜなら、皆が止まってくれるわけではないからだ。横断歩道の前で立っていても止まってくれない車の方が多い気さえする。そのことを母に意見すると、残念ながら現状では、止まってくれるドライバーばかりではない。しかし止まってくれる人は交通ルールを守れている人であり、一礼して横断することで、交通ルールを守る人を増やすことにつながるというのだ。納得できずにその時の話し合いは終わった。

ある日いつもの様に止まってくれた車に先に行ってもらおうと手振りをすると、再度渡るように手振りを返された。おそろおそろ渡ってみると反対車線の車も止まってくれた。再び会釈をすると、ドライバーの方々は笑顔でうなずいてくれた。母の言葉に初めて納得

した。私だけでなく、止まってくれた人たちも皆、気持ちがびんとした気がしたからだ。
このような気持ちの良い思いをすれば、交通ルールを守る気になるではないか。

再度母と話した。車が止まった時は注意しつつ渡ることにしたと。お互いが気持ちよかったと。母は言った。感謝の気持ちや相手を思いやる気持ちが交通ルールを守ることにつながると。今では母の言葉の意味が分かる。何度も親子で話し合った「交通ルール」はほんの少しの感謝で、皆が気持ちよくなり、ルールを守る人を増やすことにつながることを実践していきたい。